

体育科・保健体育科における思考力・判断力・表現力の育成

1 体育・保健体育科における思考力・判断力・表現力について

本学校園の体育・保健体育科では、これまで、「運動の心地よさを味わわせ、学び合う中で技能をのぼす体育・保健体育学習」をテーマに、11年間の学びを見据えた授業研究を実施してきた。また、その背景には、①学習者が運動に参加することを通して、その運動が発生して以来今日に至るまで人々が享受してきた本質的なおもしろさに気付いていくこと②仲間と共に課題を探究することを通して課題の質を高めつつ学びを共有していくこと③客体としての身体を用いて身体技法を習得しようとする体験と「このように動きたい」という意志をもったからだとして課題を探究しようとする体験とを行き来しながら学習課題である身体技法を形成していくこと、といった営みが三位一体となって学習活動のなかで展開されるべきであるとする学習観がある。このような学習活動において、学習者は仲間と共に身体技法を習得しそれらの技法を状況に応じて活用することに向かって学習課題を探究することとなる。その過程で、学習者は「できるようになりたい」ことへ向かって、「自分達の課題は何なのか」「自分達は今何につまづいているのか」「それはなぜなのか」「どうしたらうまくできそうか」などを意識しながら、仲間同士で動きを合ったり話し合ったりすることを通して思考力・判断力・表現力を育てていくのである。

2 体育・保健体育科における思考力・判断力・表現力を育成する学び合いとは

学習課題である「できるようになりたい」動きができるようになるために、本学校園では、グループ学習を中心に、学習者の学び合いをすすめてきた。例えば、以下のような一連の学習活動があげられる。学習者は仲間同士で動きのフォームや組織的なプレイの様相を見合い、仲間が今どのように動いているかをフィードバックし合うことによって動き方のコツを発見する。そして発見したコツを学級全体に紹介し話し合うことによって「こうしたらうまくできそうだ」という仮説をたてる。そして、学級全体でその仮説を共有し、動きのコツを意識しながら練習する活動によって仮説を立証し、動きを習得していく。この一連の学習活動を通して、学習者は再現可能かつ普遍的な身体技法を習得するのである。この「再現可能かつ普遍的な身体技法の探究」は「その運動が発生して以来今日に至るまで人々が享受してきた本質的なおもしろさ」なのであり、自分自身では見ることでできない「今この瞬間の自分の動き」を仲間とフィードバックし合うことによって見えてくる発見なのである。発見された動きのコツは、運動の主体たる自分自身でありながら同時にパフォーマンスの道具でもある自分のからだによって立証される普遍的な動きの原理原則でもある。学習者のからだは個人に固有のからだであると同時に人間として普遍的なからだでもある。個と普遍とを行き来するからだの上に、思考力・判断力・表現力を育成する学び合いが成立しているといえる。

3 体育・保健体育科における学んだことをいかすという事

体育・保健体育科における11年間の学びを見通したとき、既習事項の積み上げは重要である。例えば、低学年時に学習した鬼遊びは、緩急をつけて走ったり直線的・曲線的に走ったりする運動感覚を習得するだけでなく、鬼のいない空きスペースをみつけて走るといった空間を認知する能力や相手の走る速度との差を見計らって自分の走る速度を決定するといった速度を認知する能力も育成する。低学年段階に鬼遊びで育成されたこれらの運動感覚や認知能力は、中学年以降では、ゴール型ボール運動・球技において「空きスペースをみつけて走り、パスをもらう」といった戦術学習にいかされる。既習事項を活用して自分がいつ・どこに・どのように動いたらよいかを思考し・判断し・それを仲間に伝える力を育成することができるのである。そのためには、学年段階が低いうちに基礎的な運動感覚を習得しておくことがその後の学年での学習成果を左右する。また、学習者が運動感覚と認知能力を関わらせながら学習課題の達成へ向かえるような場を形成することも重要である。今年度、本学校園の体育・保健体育科では、グループ学習における試行や仲間同士のフィードバックのあり方を工夫しつつ、授業研究を深めていくことになるであろう。

(共同研究者：島根大学教育学部初等教育開発講座，廣兼 志保)